

## まほうのポケット

浅野 智博

ぼくのお母さんは朝からよくおこる。「早くおきて。早く食べて。テレビをけして。しゅくだいをやって。はをみがいて。電気をけして。」ずっとそんな毎日だった。

ある日、お姉ちゃんどけんかした。ぼくはお姉ちゃんをたたいて、お母さんにおこられた。「お姉ちゃんもたたいた。」と言うと、お姉ちゃんもお母さんにおこられた。ぼくは、お姉ちゃんにあやまるのがいやだった。

しばらくして、お姉ちゃんがカレンダーのうらに、紙でいくつものポケットを作りはり出した。そして、そのポケットにかぞくの名前や天国のじいじの名前を書いて、何か紙を入れていった。ぼくの名前のポケットの中には、お姉ちゃんからの手紙が入っていた。

「先はごめんね。」と書いてあった。

ぼくもお姉ちゃんのまねをして、カレンダーのうらに、いくつもの紙のポケットを作って、かぞくの名前を書いた。手紙を書くかと思ったら、お姉ちゃんやお母さんやじいじやばあばやお父さんのやさしいところが、うかんできた。ちよつと、はずかしいけれど、お姉ちゃんのまねをして、ハートをいっぱいかいてみた。

ぼくもお姉ちゃんに、「ぼくもごめんね。」と手紙を入れてみた。お姉ちゃんがポケットの中を見て、「いっしょにあそぼう。」と言ったので、「いいよ。」とぼくは言った。お姉ちゃんといっしょに、手紙を書いた。お母さんにも、「お母さん、手紙を書いたよ。」と言って、「やさしくおこってね。」という手紙を入れてみた。

お母さんからぼくのポケットに手紙がやって来た。「いつもおこってばかりでごめんね。よくなつてほしいからおこるんだよ。大すきだよ。」と書いてあった。

その次の日も、またその次の日も、いつもお母さんは、朝からおこっている。だけど、なんだかお母さんが、ぼくのために、おこっているんだと思うようになって、ぼくはおこることもまあいいかと思うようになった。

「ぼくはお母さんが大すきだよ。やさしくおこってくれたら、もっといいお母さんになれるよ。」と書いて、お母さんのポケットに入れてみた。それから、手紙は来なくなったけれど、お母さんがおこるとき、すこしやさしくなったような気がする。

お姉ちゃんが作ったまほうのポケットは、なんだか心がポカポカするふしぎなポケットだ。「ぼくは、かぞくが大すきだよ。いつもありがとう。」なんて、はずかしくて、言えないけれど、ぼくの本当の気もちだ。その手紙を、お父さんのポケットに入れてみた。まだお父さんは、気づいてないみたいだけど、ぼくの心は、なんだかポカポカしている。

「お姉ちゃん、まほうのポケットを作ってくれてありがとう。夏休みに、ばあばのおうちへ、まほうのポケットをもって行こうね。」